〈論　文〉

富士塚と富士講―鐘ケ嶽と富士信仰をめぐって―

大野　一郎

はじめに

平成二十五年六月、世界文化遺産に登録された富士山だが、この登録が「信仰の対象と芸術の源泉」からの評価であったことを喜びたい。富士山に対する信仰は、ここ神奈川でも大変に盛んであったことを『神奈川の富士講』(1)に掲載された県内の富士塚、富士講の事例が語っているからだ。その著者である富士信仰研究の先達・大谷忠雄氏は、書名の「富士講」だけでなく、県内各地の「富士塚」つまり人工のミニチュア富士山についても詳しく記録している。

大谷氏はその富士塚について「いわゆる江戸型の富士塚が、三浦半島、相模川右岸にはみられず、川崎市北部から藤沢市までの県東部に集中している」(2)との指摘もしている。これに対し、平本元一氏は鐘ケ嶽（厚木市七沢）における信仰活動の事例を「富士塚の大型化」(3)と捉えた報告を行っている。筆者は平本氏の報告を受け、この問題を富士塚との類似点、相違点から考えられないかと展示会、談話会などで問題提起をしたことがある(4)。小稿では、鐘ケ嶽と厚木の富士信仰を中心に、さらに「相模川右岸」周辺のいくつかの事例をみることで、大谷氏が指摘した神奈川の「富士塚」「富士講」に関する諸問題について整理しておきたい。

一　「富士塚」「富士講」とは

富士山は、八世紀成立の『常陸国風土記』の時代から神の住む山として信仰されていたが、中世までは修験者以外を寄せつけない山であった。江戸時代になると、富士山を信仰し登拝し代参する富士講により、庶民登拝の時代が到来する。課題について論じる前に、富士塚、富士講それぞれの概要について簡単にふれておこう。

講印	講　名	拠　点	創立者
	タテカワ講	武州川崎宿	西川伊右衛門
	ヤマトミ講	武州稲毛玉川	要蔵
	フジカスミ講	武州神奈川	——
	モトイチ講	相州藤沢宿	九左衛門
	マルフク講	相州小田原宿	——
	（講名不明）	相模国	——

まずは富士塚の造立者であり、信仰母体である富士講についてみてみよう。

富士講とは、先達といわれるリーダーを中心とした富士山を信仰するグループのことだが、神奈川圏域（南武蔵及び相模地方）に進出したのは、かなり古い時期と考えられている。富士講はまず江戸市中で組織され、江戸周縁の村々に広がっていった。そして、その周縁部の諸村でも独自の講が設立され、さらにその周辺各地にも派生していったのだ。神奈川県域では、地域で独自に発生した講が多いと思われる。

鉄炮洲本湊町（現 東京都中央区）の泰行長嶋庄治郎が、天保十三年（一八四二）に作成した「富士講惣印図」に、神奈川県内の講として六つの講名、その創立者の名が記されていることを平野榮次氏は指摘している(5)。

当時、「江戸は広くて八百八町、江戸は多くて八百八講」といわれた。つまり、一つの町に一つの富士講があったほどに、富士講は盛んであった。各地に組織された富士講の中から、由緒ある講一〇八つを選りすぐって作り上げたのが惣印図であるから、江戸後期には神奈川県にも歴史ある講があったことが確認できる。また、川崎、藤沢、小田原

など、そのような講が存在した地域から、街道伝いに広がっていったことも伺われ、地方都市である宿駅がその拠点となっていたこともわかる。

一方、県東部、西部、そして東海道沿線の富士信仰と比べると、県央部の富士信仰集団は、講名などから江戸の著名な元講から分かれた枝講のさらに、その分れと考えられる。あるいは直接、富士御師が来村し、その関わりの中で発達していったことも想像される。その中には、高座郡上溝（相模原市）の人で、菊田式部の弟子であった誓行徳山、高座郡上郷（海老名市）にも、富士講中興の祖・食行身禄の直弟子・日行青山が「御伝え」を授けた玉行星山（井上吉兵衛）の存在などが分かっている。

その富士講が造立者主体となる「富士塚」とはどのようなものなのか。その定義は、一般に①富士講徒による加工、②奥宮、小御嶽、烏帽子岩、胎内を設ける、③その他、稲妻型の参道、富士山の溶岩塊を張り付ける、ミニチュアの人工富士山をさすが、確定的なものではない[6]。例えば、古墳もしくは崖、丘状の地形を利用した富士塚について岩科小一郎氏は当初「それはちがうといいたい」と、富士塚であることを否定した。平野榮次氏は、古墳利用の駒込富士を富士塚から外しながらも、富士講徒により、富士塚への正統な加工が施されていれば富士塚といえるとする[7]。

現在、そのいくつかが国指定の有形民俗文化財にも指定されている富士塚だが、富士講中興の祖・食行身禄の直弟子である日行青山（高田藤四郎）が造立した高田富士（東京都新宿区、消滅）がその嚆矢である[8]。この富士塚へは、御山開きの七月一日に善男善女がお参りをしたり、七ヶ所の富士塚を回る「七富士参り」が行われたりもした。

大谷氏の「いわゆる江戸型の富士塚」とは①～③までの条件を満たすような塚を意味している。そして、それが「川崎市の北部から藤沢市の県東部に集中し」ており、「相模川西岸、藤沢用田の山高丸照講造立になる富士塚（すでにない）より西にはみられない」[9]ものと指摘する。

では、神奈川県央、県西部には富士塚はないのか、ある

いは「江戸型」ではないタイプの富士塚があるのか、それが本稿の一つのテーマとなる。ここでは、厚木市域の富士塚を例にみてみたい。

厚木で「フジヅカ」という言葉がさす対象は、二つのタイプに分けられると飯田孝氏は述べている[10]。一つは宝永四年（一七〇七）の富士山噴火の際に降り積った火山灰を集めて塚としたもの、もう一つは富士信仰のために作られたものであるといい、前者の火山灰で作った塚上に祠を建て祀ったものも含むという。

先にあげた富士塚の定義からみると、①、②の祠の設置以外は満たすところがないが、宝永噴火の富士砂を盛った塚に祠を立てたのが、厚木市依知の藤塚地区にある富士塚だ。塚上には祠が据えられ、その中に保存されている碑には「富士講惣印図」のタテカワ講創立者「大先達　川崎宿西川伊右衛門」の名もみられるが、富士講、祭祀主体はすでになく、祭祀形態など詳細は不明である[11]。

また、後者の変形型富士塚は厚木市及川地区にみられる。これは江戸時代に彦惣塚と呼ばれていた既存の塚を、丸山教の信者が富士塚に改造したものだ[12]。在地の富士講に代わり、扶桑教や丸山教など富士信仰を中心に据えた新興宗教が強烈な勢いで入り込んできた明治期の宗教事情を物語る。明治期のものではあるが、これも①富士講徒による加工、ということから、富士塚とみることが可能だろう。

神奈川県央部では、丸山教が主催した明治十三年（一八八〇）の相模川天拝式に三万六千人が集まったといい、高座郡磯部（現相模原市）には信徒九万三千人を誇った皇徳泰教会所があった。厚木市域にもいくつかの丸山講社が確認されている[13]。当時、丸山コレラと呼ばれたように爆発的な勢いで信者を獲得していった丸山教については、自由民権運動とも結びついたところもあるようだが、ここでは詳しくふれることはしない[14]。

二　鐘ケ嶽の信仰と富士信仰

「江戸型ではない富士塚」の二事例を提示し、その実体

【写真２】浅間神社

【写真１】鐘ケ嶽

【写真４】18丁目丁石（㊥講）

【写真３】12丁目丁石（元一 ㊥講）

【写真６】庚申記念碑（大正９年）

【写真５】22丁目小御嶽石尊　大権現

をみたが、本章では小稿のテーマである「富士塚に代わるもの」として、厚木市七沢に位置する鐘ケ嶽の信仰をとりあげ、石造物などからその機能についてみていきたい。

鐘ケ嶽は、「海老名側から見ると、大山の手前に見えるハヤマ（奥山に対する端山、里に近いこんもりとした山）である。山林修行拠点としての山岳寺院を建立するには絶好のロケーション」[15]と城川隆盛氏が述べるように、鐘ケ嶽廃寺跡がある古代からの聖地である。山頂には、修験の行所コースとの関連をうかがわせる二体の不動石造がある。一つは高さ百三十二cmの旧像、その損傷が激しいため、明治十五年（一八八二）に再建された高さ百二十一cmのもう一つの石像もこの山の信仰のあり方を示している。

ただし、前章でとりあげた二事例とは異なり、富士塚の定義、①～③を満たしていない。その鐘ケ嶽（写真1）に対し、平本元一氏は「一種のミニ富士化、富士塚の大型化と見られるような状況が窺える」[16]と述べている。平本氏は何故、そのように述べるのか。その概要を『七沢浅間神社とその周辺に関する調査』[17]からみていく中で、「富士塚」との類似点、相違点を考えてみたい。

浅間神社（写真2）を山頂に祀る鐘ケ嶽（別名浅間山）は、参道の十五丁目～十七丁目付近より平安期の布目瓦や須恵器が出土しており、古い時代から信仰の対象となり、信仰施設があったことがわかっている。浅間神社は、明治初年に村内の山王社、八幡社などを合祀して「七沢神社」となり、七沢の大竹地区にある旧八幡社の建物が、七沢神社の遥拝所となった。

また、近世期には、社殿より一段下がった場所に、別当寺として尾張徳川家の信仰が厚かった禅法寺という天台宗の寺院があった。この寺院は明治初年に廃寺となり、一部の什物、宝物が浅間神社や観音寺に伝えられている。

七沢横畑地区の浅間神社への別れ道には「せんげんみち」と刻んだ道標があり、これを頼りにしばらく行くと、浅間神社に向かう登山口である石鳥居の前「トリイバ」にでる。ここを起点に、山頂社殿の鳥居下の二十八丁目までの参道

には、順路を示す丁石が建てられている。石造物の多くは、文久四年（一八六四）に奉納されている。これらの丁石は、風化によって銘文が判読できないものもあるが、多くの富士講信者によって建てられたものである（写真3～5）。

参道の二丁目から九丁目までの丁石は、富士信仰とは関係なく、左表のような丸彫りの仏像が載せてある。

十丁目から二十八丁目までの丁石は、下表のように富士山を信奉する神奈川県央地域の富士講の人々が、その講名、講員名、いくつかには講のリーダーである先達名を記し、奉納されたものである。

丁目	仏像	縁日
三丁目	虚空蔵菩薩	縁日十三日
四丁目	文殊菩薩	縁日二十五日
五丁目	普賢菩薩	縁日二十四日
六丁目	勢至菩薩	縁日二十三日
七丁目	大日如来	縁日八日
八丁目	不動尊	縁日二十八日

丁目	奉納講中	講中所在地等
十丁目	元一 照講	大和市福田、大磯町中丸
十一丁目	元一 照講	厚木市長谷
十二丁目	△朝日高講	大磯町西小磯　先達甚四郎
十三丁目	△高 照講	綾瀬市本蓼川、海老名市門沢橋
十四丁目	元一 照講	伊勢原市高森
十五丁目	丸川上講	藤沢市打戻
十六丁目	東講	藤沢宿
十七丁目		八王子市寺町
十八丁目		綾瀬市吉岡、平塚市南金目、「土屋村先達庄右衛門、矢沢村先達万右衛門、上古沢村先達熊蔵」
十九丁目	泉講	横浜市和泉
二十丁目	泉講	横浜市和泉
二十一丁目	△高 照講	横浜市宮沢
二十二丁目	△高 照講	藤沢市用田　小島喜太郎事静行喜山
	△高 照講	藤沢市用田　先達用田村静行喜山
二十二丁目		藤沢市菖蒲沢、同宮原
二十三丁目	△高 照講	海老名市今里
二十五丁目	△高 照講	藤沢市葛原
二十六丁目	△高 照講	綾瀬市吉岡
二十七丁目	△高 照講	（不明）
二十八丁目	△高 照講	

奉納講中は、八（以下、△はこの文字を示す）高照講（10基）元一照講（2基）、福講（1基）、朝日高講（1基）、川上講（1基）、泉講（2基）、△高長講（1基）、東講（1基）の十九例、相模国内はもちろんのこと武蔵国の人も含む、広域からの寄進となっている。では、この鐘ケ嶽への丁石寄進の勧化の中心となったのは誰なのか。

丁石の奉納主体からみると、十二基の寄進を行った講が、用田村（藤沢市）の△高照講である。この講中の講元は、静行喜山の号をもつ小島喜太郎という高座郡用田村（藤沢市）の人。丁石の碑銘には静行喜山を「月参先達」としたものもあり、ここからは月参りをしていたことも伺われる。富士講信者は「月拝み」と称し、信者が崇拝する神々の名を記した「御身抜き」とよばれる掛け軸をさげ、経文を唱えたり、御焚きあげをしていた。「月参先達」静行喜山が鐘ケ嶽で、誰とどのような儀礼を行っていたのかは分らな

「△高照静行喜山霊神
喜法壽山霊神　位」（表）
「明治八亥一月十九日
富士社中門家
小嶋喜太郎静渙
大蔵村産
同人妻ゆき」（右）
「浄土□（まで）□　富士見て行や　ながき旅　杜鏡齋」（左）

【写真７】

いが、月拝みに類するような参詣を行っていたのだろうか。

二基に講名を残す元一�照講は、先の物印図にもある藤沢の元一講[18]の枝講であり、藤沢宿とのつながりもみられるが、�照講の講名から静行喜山が先達であったことが知られる。鐘ケ嶽への建碑活動は、�照講が静行喜山・小島喜太郎家がある用田村を中心として、南は藤沢宿、大磯、そして近隣の綾瀬、海老名などとの係わりも深めていったことを物語る。

用田村にある小島家墓所には、ともに富士信者だった喜太郎夫妻の墓があり（写真7）、△高�照の字が刻まれ、富士を詠み込んだ辞世の句も彫られている。墓碑銘から富士講先達であった喜太郎夫妻の葬祭は神葬であったと思われるが、次の代からは仏葬に戻っている。

一方、丁石寄進の勧化活動を鐘ケ嶽・浅間神社の側からみると、その信仰を広域に広めたのは、浅間神社別当寺であった禅法寺の僧侶・正念道奥（しょうねんどうおう）（？～）元治元年＝一八六四）と考えられている。丁石寄進を始めとする盛んな活動を見せた年代から、この道奥が浅間神社（鐘ケ嶽）と養蚕、富士山（庚申）などの信仰を結びつけたのではないかと飯田孝氏は推測している[19]。

養蚕が盛んになった近世末期、鐘ケ嶽浅間神社は、富士山・木花開耶姫信仰と養蚕信仰とを結びつけ、近郷付近の養蚕農家を始め、相模国、多摩地区から信仰を集めていたことを禅法寺の初穂料受領書が示している。また、養蚕農家が県内になくなった現在でも、浅間神社では一月二十六日にロクヤサンという祭りがあり、養蚕が当たるように買い求められていたダルマ、飾り物が売られている[20]。

正念道奥と静行喜山、また各地の富士講先達はどのように結びついたのだろうか。禅法寺へ養蚕祈願のために鐘ケ嶽に集まった富士講先達、信者に声をかけたのは、信仰圏拡大を狙う道奥か、�照講の枝講を作ろうとした喜山なのか、そうであれば実際の勧化方法はどのようなものだったのか。これらを物語る資料は未だ見つかっていない。

鐘ケ嶽の丁石には、藤沢宿の元一講、小田原宿の㊇講と

いった先にとりあげた惣印図にもある大きな元講、歴史のある㊥講などの枝講もあったが、丁石の碑銘からは、元一講の枝講、照講を兼ねる講の存在もみられる。そして、養蚕が盛んな八王子など多摩地区の富士講と照講をつないだのはこの鐘ケ嶽の養蚕信仰の存在が大きいと考えられる。このようなことから、富士講先達へのアプローチは喜山が行ったのではないだろうか。

鐘ケ嶽に丁石寄進を行った講社は照講を中心に近隣諸地域に多くみられ、鐘ケ嶽が位置する七沢村及び厚木市内の講中は、長谷村の㊦講が一つあるだけである。このことからも、各地の富士講先達への働きかけは照講または静行喜山が行った可能性が高くなるのではないだろうか。道奥ならば地元とのつながりから進めるのが順当だからだ。

では、近世以降、厚木市域における富士信仰集団の状況はどうだったのか。金石文、古文書、御札、関連資料及び伝承などからその存在は知られているが、詳細については不明な点が多い。これまでにあげたもの以外で厚木市域の富士信仰についての情報をランダムにあげ、整理しておく。

① 吉田御師・菊田式部の檀廻りの地域として、その日記に「依智」（依知）の名がでてくる[21]

② 萬延元年（一八六〇）の御縁年には、富士吉田市の御師・上文司清宜の手引によって妻田村の七人が富士登山を行っている[22]

③ 厚木町に（富士山）東口御師　大申学久太夫による札が残されている[23]

④ 幕末、厚木町の取り極めに東口御師　大申学久太夫との間で初穂料を定めたことを記した資料[24]

⑤ 厚木町に井上某という富士行者がいて、巻物を持っていたが、秦野へ越した[25][26]

⑥ 七沢村へ、扶桑教団が布教に入ったことを示す資料[27]

⑦『職員録　神道扶桑教共済講社』（明治二十七年）に先達として南毛利村・吉岡治次、林村・日下領道、水島忠次郎の三名の名がある[28]。

以上の資料が示すように、厚木市域には、東口の須山、須

走、そして吉田口の御師が入っており、明治以降は、丸山教、扶桑教など教派神道系の富士信仰が広がったと考えられる。

いずれにせよ、富士講社と直接のつながりを持たない正念道奥が各地の富士講先達への働きかけを行うのは困難であっただろう。資料⑥は七沢村在住の浅間神社の氏子にも富士信仰をもつ者たちがいたことを表すが、彼らは鐘ケ嶽へ丁石の石造物寄進を行っていない。氏子たちが鐘ケ嶽へ富士信仰絡みの石造物寄進を行うのは、庚申記念碑（写真6）が建立される大正九年の御縁年を待たねばならない[29]。

実は禅法寺縁起によれば、浅間神社にとって禅法寺は別当寺以上の因縁があることを伝えている。縁起は、上杉定正の七沢城落城以降、荒廃していた禅法寺を修繕しようと鐘ケ嶽の立木を伐採したところ、氏子たる村人が突然倒れたと伝える。巫女をよび伺いをたてると「鐘ケ嶽は、禅法寺ではなく浅間神社の所有」という神託が伝えられた。この縁起は元禄元年頃の成立と考えられるが、当時の浅間神社、禅法寺の関係の一端を物語っている[30]。正念道奥と静行喜山、そして七沢の富士講信者との関係は一筋縄ではいかない。

以上、平本氏が指摘した「一種のミニ富士」「富士塚の大型化」としての鐘ケ嶽及びその信仰についてみてきた。鐘ケ嶽は「江戸型」富士塚の要件は満たしていないが、「頂上部の社」として浅間神社を持ち、近隣各地の富士講社から信仰を集めてきた。鐘ケ嶽は「富士塚に代わるもの」と言えるだろう。形態上、富士塚として欠けているものは明確だが、それでは「江戸型」富士塚にはない機能とは何か。

鐘ケ嶽へ寄進された丁石の役割を考えてみよう。第一に鐘ケ嶽登拝者へ自分の位置を示すことが主な目的だろうが、誰も通らない場所へ建立することは考えにくい。寄進主体である講社の記念碑でもあったと考えられ、だからこそ、講員全員と思われる多数の名を刻んだのだろう。そして、月参先達を名乗る㉝講・静行喜山はもちろん、各地の富士講先達、講員たちも鐘ケ嶽登拝を行ったのではないだ

ろうか。であれば、江戸型の富士塚に「七富士参り」の慣習があるとはいえ、基本的には特定地域の施設であり、当該地区の住民が利用するもの。鐘ケ嶽は、立地地域の富士信仰対象としてではなく、㊥講・静行喜山と正念道奥の活動によるより広域によるものであり、それらの地区を結びつける山という意味もあったのではないか。

三　明治九年の外八湖修行

「八湖修業休泊記　明治九丙子年第二月吉辰」[31]という道中記がある。「八湖修行」とは下表のように富士講祖・角行東覚の修行地である内八湖と外八湖を組み合わせた水行修行地のセットである。富士登拝、中道巡りとともに富士講徒は、この修行を重視している。

一度で巡礼可能な内八湖修行とは異なり、滋賀県から茨城県にわたって、地図上の距離で一〇〇〇㎞を超える周回コースとなるのが外八湖修行である。

当然、時間も金もかかり誰でもができるものではない。

内八湖：山中湖、川口湖、西湖、精進湖、本栖湖、泉水（吉田浅間神社の御手洗池）、明見湖、四尾連。

外八湖：二見浦（三重県）、竹生島（滋賀県）、芦ノ湖（神奈川県）、諏訪湖（長野県）、榛名湖（群馬県）、日光湖（＝中禅寺湖、栃木県）、佐倉湖（静岡県）、鹿島湖（＝霞ヶ浦、茨城県）

この大変な修行に挑んだのが、次頁の表に記した「八湖修行休泊記」の仲間たちである。十三人の仲間の中心は八王子の割菱講先達・金井津右衛門で、他は武蔵、相模、現在の行政区域でも五市にわたる広範囲の人たちからなる団体だ。では、この人たちはどのように知り合い、この修行に参加したのだろうか。

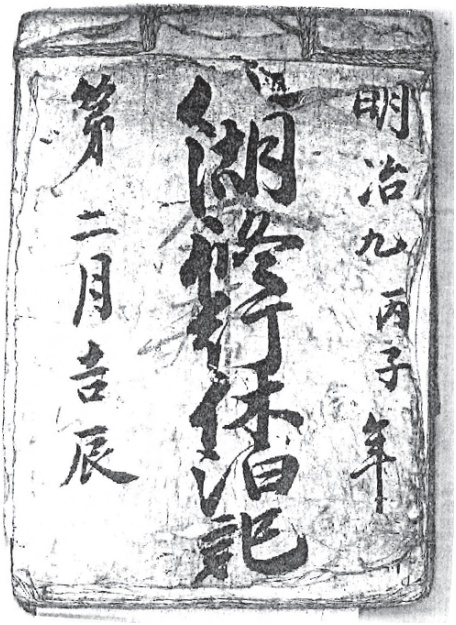
割菱講先達・金井津右衛門の居所、田名村に「篠崎家日記」（文政十三～天保八年）が遺されている。柴田力雄氏は、ここから富士先達・八行を中心に、富士信仰に関連する個所を抜き出してまとめている[32]。そこには、青梅（青梅市）、

相原（町田市）、菅生（多摩市）、大島（相模原市）、八王子、

名前	住所	現地名
金井津右衛門	神奈川縣相州高座郡田名村	相模原市
金井外之助	同州同郡田名村	相模原市
小野沢惣兵衛	同州同郡溝村	相模原市
錬間虎蔵	同村	相模原市
瀬戸彦作	同州同郡座間村	座間市
安藤厚太郎	同州同郡新戸村	相模原市
清水兼吉	武州多摩郡舘村	八王子市
鷲巣徳平	足柄縣相州愛甲郡厚木村	厚木市
小宮　兼	同縣同国大住郡田村	平塚市
山本清兵衛	神奈川縣武州多摩郡舘村	八王子市
山本民蔵	同縣武州多摩郡舘村	八王子市
山口佐兵衛	同縣同州同村	八王子市
井之上馬之助	同縣同州下長房村	八王子市

舘村（八王子市）、川和（横浜市）、山際、棚沢（厚木市）、上溝、小山、勝坂（相模原市）、宮寺村（入間市）、座間（座間市）と、富士講を通じて広い範囲との付き合いが記されている。「篠崎家日記」にも、講として行った内八湖の記録はあるが、外八湖修行は枝講を含め、このような仲間をベースに行われたのだろう。

一般に、ひとつの富士講の講員が、他所の講員と信仰活



動をともにすることはさほど多くないと考えられるが、元講、枝講、同じ先達に導かれる講同士では、「篠崎家日記」のように、日常の付き合いがあったのかもしれない。

「外八湖修業」のような事例からすれば、㊟講・静行喜山と正念道奥の活動によって鐘ケ嶽に結びつけられ人々が何かのアクションを起こす、それが丁石建碑だったことも考えられないだろうか。近辺では鐘ケ嶽、明治以降に従来の富士講を取り込むことで教派神道として発達した扶桑教、丸山教などの教団信者の活動もみられる。従来の富士講を越え、どのように再編されたのかなど、鐘ケ嶽と富士信仰の在り方を考える上で取り組むべき課題もでてこよう。富士塚の定義、一番目に「富士講徒による加工、構築」があるのであれば、その視点からも考えていかねばならないだろう。

まとめにかえて

大谷忠雄氏が『神奈川の富士講』で県内の富士塚、富士講の事例をまとめて四十年、平本氏が「一種のミニ富士」「富士塚の大型化」として鐘ケ嶽の信仰を紹介、指摘してから三十年、このような成果をもとに筆者が展示会を開催してからでさえも二十年近くが経過した。この間、神奈川の富士信仰研究をリードされてきた大谷氏、展示会をサポートして下さったた平野榮次氏、小林謙光氏など多くの富士信仰研究者が相次いで鬼籍に入られた。生前の大谷氏から頂いた宿題も放りだしたまま、何の報告もできない筆者としては忸怩たる思いもある。

いくつかの富士塚が国指定の有形民俗文化財に指定され、昨年は富士山が世界文化遺産に登録された。富士山に対する人々の関心は大いに高まっている。岩科小一郎氏等による定義や「江戸型」にしばられることなく、再度、富士塚について考えてみては如何だろうか。大谷氏から頂いた宿題に対し、経過の一部だけでもまとめておくことで、多くの人にこの問題を考えていただければと考えている。

〔注〕

(1) 大谷忠雄『神奈川の富士講』、昭和四十九年、神奈川県教育委員会

(2) 大谷忠雄「南武蔵・相模の富士塚」「南武蔵・相模の行者たち」平野榮次編『民衆宗教史叢書第16巻　富士浅間信仰』、昭和六十二年、雄山閣

(3) 平本元一「富士浅間信仰」『七沢浅間神社とその周辺に関する調査』昭和六十年、厚木市教育委員会

(4) 厚木市教育委員会『広重の冨士三十六景』平成八年、また日本石仏協会の石仏談話会（平成十三年六月）で「県央の石造物について～富士塚とそれに代わるもの～」の発表を行った。

(5) 平野榮次「神奈川の富士信仰」『広重の冨士三十六景』平成八年、厚木市教育委員会。東京都北区教育委員会『田端富士三峰講調査報告書』平成七年

(6) 平野榮次「富士と民俗―富士塚をめぐって―」『月刊文化財』202号、昭和五十五年、第一法規。中島義一氏の「富士塚の諸相」（『駒沢地理』第44号、平成二十年）によれば、東京都内一〇三ケ所の富士塚について行われた調査では、溶岩、奥宮、里宮、小御岳、鳥居、合目、講碑、地形等の項目での定型度は驚くほど高い。

(7) 岩科小一郎「東京の富士塚」『あしなか』148輯、昭和五十年、山村民俗の会。中嶋信彰氏は、富士塚の定義について、岩科説を踏襲、形式で分ける平野説が古墳利用の「駒込富士」を富士塚でないとすることに対し、信仰面からもっと大きなくくりで、浅間信仰に対する施設と考えるべきとのご教示をいただいた。

(8) 竹谷靭負『富士塚考　続』平成二十二年、岩田書院

(9) 前掲(2)

(10) 飯田孝「及川の富士塚」『郷土資料室だより』14、平成元年

(11) 厚木市教育委員会『厚木の小堂・小祠』平成七年　上依知藤塚上の小祠内の富士浅間碑二点。

①（正面）大先達　川崎宿西川伊右衛門、南品川　加賀屋安

五郎　願主　江戸三田　市屋庄助

②（正面）江戸飯倉　中村屋作次郎　同市兵衛町　伊勢屋彦兵衛　同金杉　松屋三四郎　同田町三河屋傳右衛門　同久保町　大黒屋金兵衛　同三田　布屋新助

(12) 前掲(10)

(13) 厚木市教育委員会『広重の冨士三十六景』平成八年

(14) 大畑哲「困民党異聞」『文芸多摩』36号

(15) 城川隆生『丹沢の行者道を歩く』平成十七年、白山書房

(16) その墓は子孫である用田・小島家墓所にあるが、同家は火災に遭っており、喜太郎関連の資料は残っていない。

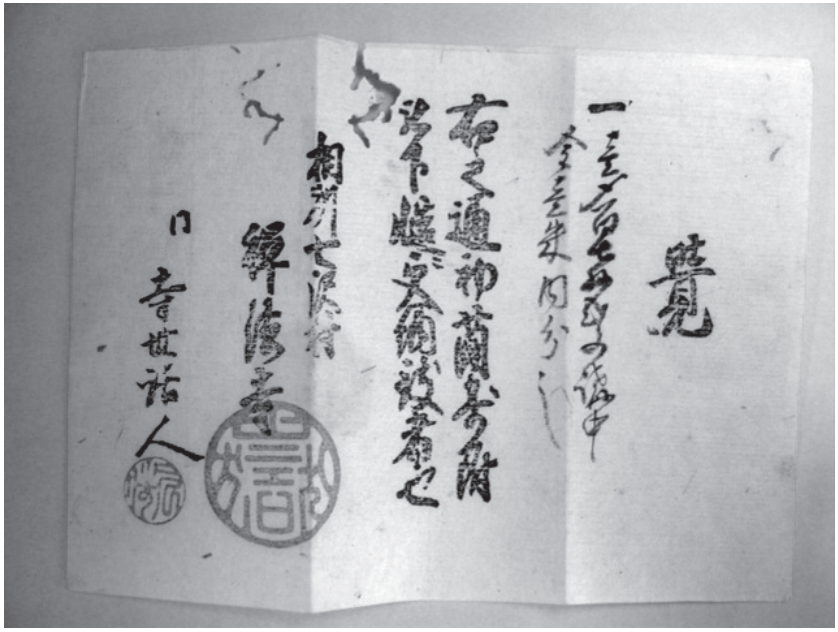
(17) 前掲(3)

(18) 前掲(5)

(19) 飯田孝「禅法寺」『七沢浅間神社とその周辺に関する調査』昭和六十年、厚木市教育委員会

(20) 「ロクヤサン」『厚木の民俗11』平成十七年、厚木市教育委員会。写真は、禅法寺による初穂受領書（小島環禮氏蔵）。

(21) 平野榮次「『菊田日記』から見た吉田御師と富士講」地方



史研究協議会編『甲府盆地―その歴史と地域性』、昭和五十九年、雄山閣

(22) 大谷忠雄氏のご教示による。

(23) 「富士一山教会講社　祈念神璽」（郷土資料館所蔵資料）

(24) 飯田孝氏所蔵「厚木町全体に関する旧記録」中の「富士山御師大猿楽太夫、上町名主方家並軒別近年七百文御初穂取極」

(25) 鈴村茂「富士浅間信仰」『野だちの石造物』昭和四十七年、厚木市教育委員会

(26) 鈴木宏「相州厚木宿に伝来した富士講資料「烏帽子岩御日並書直筆」ついて」『阿夫利』第12号、平成十一年、厚木市文化財協会

(27) 「富士一山教会講社　祈念神璽」（郷土資料館所蔵資料）は、七沢のK家の寄贈資料であるが、伊勢原市高森、秦野市東田原でも、同種の資料を確認した。

(28) 前掲(13)

(29) 厚木市教育委員会『野だちの石造物』昭和四十七年

(30) 厚木市『厚木市史　近世資料編（1）社寺』昭和六十一年、厚木市郷土資料館『あつぎ　縁起書の世界』平成二十四年。この問題に対して「立木の伐採でこの騒ぎであれば、七沢石の丁場開発、採掘の際はどうであったのか」との指摘を城川隆生氏から受けているが、未だ明らかにできていない。

(31) 岩科小一郎「内外八海修業」『富士講の歴史』昭和五十八年、名著出版。原資料は相模原市津久井郷土資料室所蔵。

(32) 柴田力雄氏からデータのご教示をいただいた。